

Examining Learning Contents of Subjects Physical Expression (Physical Education) A・B and Its Educational Effects through Students' Goal Attainment Evaluation and Teaching Skill Development

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Physical Expression (Physical Education) A・B as required teaching license subjects, examination of learning contents of PE class and its educational effects, goal-attainment evaluation, teaching skill development 作成者: SAHASHI, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4286

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



幼小教職必修「身体表現(体育)A・B」の授業内容の検討と学生の到達度評価、実践的指導力向上からみた授業効果の検証

児童学部 児童学科 佐橋 由美

要旨:本研究は、①幼小教職課程の『教科に関する科目』として開設されている「身体表現(体育)A・B」授業で扱われる内容・学習素材の適切性について、②教職授業に求められる固有の要請、すなわち実践的な指導力の育成という課題に、当該授業はどこまで応えることができているのか(授業効果)について、学生の到達度評価や指導力評価などの自己評価データを用いて、検証を行うことが目的であった。到達度評価項目には、事前にシラバスで示された「授業の到達目標」にどの程度近づけたかや、授業で学習する内容・テーマについて、子どもに指導ができるレベルで習得できたか、といった問いが含まれており、これによって授業効果とともに、内容の適切性を検討することとした。指導力の評価は、筆者が作成した35項目の「表現」活動指導力評価尺度を用いて把握した。到達度評価からは、両授業とも、授業の個別具体的な学習内容に対する評価というよりは、授業に取り組む姿勢等、態度的な側面の評価が高くなっており、個々の学習テーマ・学習素材の適、不適を知るには十分ではなかった。実践的指導力のレベルについては、各授業の終了時には有意な上昇が認められ、両授業を通じて、実践的な指導力の育成という授業の本来の課題が達成されていることから、授業の効果が確認できた。

キーワード:教職科目としての身体表現(体育)、授業内容の検討、授業効果の検証、到達度評価、実践的指導力

対象授業の位置づけと研究の目的

本研究は幼・小教職課程科目「身体表現(体育)」の授業が、その目的である学生の指導力向上にどの程度貢献できているか授業の効果について、学生の到達度自己評価等により検証を試みるものである。また、より効果的な授業構成、授業内容の改善にむけて方向性を探ることを目的とする。

「身体表現(体育)」の小学教職課程カリキュラム上における位置づけ・性格について、履修ガイド<<幼稚園・小学校教諭免許状に関する科目>>一覧等に基づき考えてみると、身体表現(体育)は、免許法施行規則に定められた『教科に関する科目』として、国語、算数、生活(理科・社会)、音楽、図画工作等の教科と並んで、とりわけ小学校の基本教科の1つとして履修すべきものとされており(『教科に関する科目』は幼稚園6単位、小学校8単位以上の履修が必須)、幼稚園・小学校教諭免許取得を目指す学生にとって、必ず履修しなければならない科目の一つという位置づけである。さらに、学科の専門課程カリキュラムにおいても、Aは学科基幹科目、Bは発展科目に位置づけられている。

授業内容に関しては、身体表現(体育)が幼稚園と

小学校課程で共通(同一)の履修科目であることから、A・B2科目で幼稚園・小学校の学習内容をカバーしなければならない。とすると、授業の性格、授業に求められる方向性はある程度定まってくる。すなわち、Aは就学前の幼児に対して、Bは小学校児童を主な対象とするというように、割振りが必要となるとともに、Aは幼稚園での幼児体育を念頭に置いた授業構成、Bは小学校の教科としての体育の学習を主眼とした授業構成を目指すということになる。さらにBについては、別の授業(「初等教科教育法(体育)」)において、小学校全体(1~6年)について詳しく学ぶことも考慮すると、幼児体育からの連続性を意識しつつ、小学校低学年に的を絞ったものとするのが妥当と考えられる。

さて、身体表現(体育)の授業計画を考えるにあたっては、授業に与えられたそのような役割・性格を考慮し、求められている内容・要素を盛り込んでいく必要があるが、この際重要な指針となるのが小学校学習指導要領、幼稚園教育要領である。役割分担に基づけば、身体表現(体育)Bでは、小学校学習指導要領(体育)で示される内容・領域を中心に授業計画を作成する必要があるが、Aでは幼稚園教育要領に基づき、授業の

到達目標や内容を決めていく必要がある。

身体表現（体育）Bの学習内容については、小学校では、「体育」は教科であり、学習内容も指導要領により細かく、明確に決められている（内容の詳細は佐橋（2016b）に示した）ため、選択幅は小さい。

一方、Aについては、どのような可能性があるだろうか。学習内容が学習指導要領により厳密に決められているBに対して、幼稚園教育要領の指示はあいまいである。また、身体表現・体育的活動の扱われ方も、教科として完全独立している小学校に対して、5領域の「健康」と「表現」を跨いでいる等、明確さに欠ける。さらに、各領域の学習内容についても、それほど細かく明確な指示はなされていないのが現状である。

そうすると、Aの学習内容は、小学校指導要領の枠組みを参考としながら編成することも、一つの選択肢となってくる。「体づくり運動」「器械・器具を使っ

ての運動遊び」「走・跳の運動遊び」「水遊び」「ゲーム」「表現リズム遊び」を内容として扱うという案である。

また、文部科学省が、2012年に「幼児期運動指針」という就学前の幼児に対する体育的活動への指針を明らかにしているので、それを参考にすることも可能である。そこでは十分な運動量を確保することとともに、「多様な運動」を経験させる必要性を説き、その多様な運動の代表例として「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」をあげ、さらに幼児期に身につけさせたい36の基本動作を明示している。この運動を中心とした学習内容が、5領域の「健康」に該当するとすれば、運動指針では明確に言及されなかったリズム運動やダンスなどの身体表現は、「表現」の領域の学習内容として位置づけられると考えられる。

Table 1 身体表現（体育）A（平成28年秋学期）授業計画

回数	テーマ・領域	内容・具体的項目・説明
1	ガイダンス	授業の到達目標・学習内容(教育要領・保育指針等)の確認、授業記録(マイノート)の記入法
2	移動の運動(歩く・走る・跳ぶ)で遊ぶ	様々な移動運動(這う・歩く・走る・片足・スキップなど)を体験し、鬼ごっこやリレーなどの運動遊びへと展開させる
3	友達とかかわって遊ぶ①	友達と触れあう体験をする、身体接触を伴う遊び・ゲームのいくつかを体験する
4	友達とかかわって遊ぶ②	グループで協力して解決していくゲーム(ASE: Action Socializing Experience)を体験する
5	道具を使って遊ぶ①	輪(フラフープ)、縄を使った運動遊びの体験、特にいろいろな大縄跳びの跳び方を学習する
6	道具を使って遊ぶ②	大縄跳びの練習、パンパーダンス・リンボーダンスの体験、一輪車・竹馬の練習
7	表現・リズム遊び(動物の真似を含む)①	動物の歌を集めた課題曲集(CD)の中から、「すずめがサンバ」の振付を考える
8	表現・リズム遊び(動物の真似を含む)②	課題曲集(CD4枚)からグループで2曲を選択し振付する、うち1曲を各グループ発表する
9	表現・リズム遊び(動物の真似を含む)③	課題曲集(CD4枚)からグループで2曲を選択し振付する、うち1曲を各グループ発表する
10	表現・リズム遊び(動物の真似を含む)④	課題曲集(CD4枚)からグループで2曲を選択し振付する、うち1曲を各グループ発表する
11	表現・リズム遊び(動物の真似を含む)⑤	リハーサル、作品発表会(①～④)で作成した7作品から3作品を選んで発表する
12	運動遊びリーダー実習①	グループで「表現・リズム遊び」「運動遊び」の2領域からなる10分程度の体育プログラムを考える
13	運動遊びリーダー実習②	プログラム内容の話し合い、どの領域を担当するか役割分担、プログラム進行のシミュレーション
14	運動遊びリーダー実習③	体験会: グループメンバー以外が子ども役となり、リーダー役の主導でプログラムを実際に行っていく
15	まとめ	ダンス発表会のVTR観賞、目標到達度等のアンケートによる授業の振り返り、マイノート提出

Table 2 身体表現（体育）B（平成29年春学期）授業計画

回数	テーマ・領域	内容・具体的項目・説明
1	ガイダンス	指導要領による学習内容の概略・目標・課題の確認、授業記録(マイノート)の記入法
2	体づくり運動と走	走ることを中心としたいろいろな体づくり運動の実習、グループ対抗リレー等の走のゲーム
3	体づくり運動と走・跳	遠くに跳ぶ・巧みに跳ぶを中心とした体づくり運動の実習(縄跳び・いろいろな縄跳びの方法)
4	体づくり運動-音楽に合わせて縄跳びパフォーマンス	“さんぽ”に合わせたグループ縄跳びパフォーマンスを作成し、発表する
5	器具・器械を使う運動	輪・縄・ボールを使った様々な運動遊びの実習、一輪車・竹馬の練習
6	器具・器械を使う運動(跳び箱・マット運動の基礎)	跳び箱運動・遊びの実習、マット運動の基本技の練習
7	器具・器械を使う運動(マット運動への挑戦と工夫)	マット運動グループパフォーマンス(輪・縄・ボール・一輪車等を使って)づくりと練習
8	器具・器械を使う運動(マット運動への挑戦と工夫)	マット運動グループパフォーマンス(輪・縄・ボール・一輪車等を使って)づくりと練習
9	器具・器械を使う運動(マット運動への挑戦と工夫)	グループパフォーマンス発表会
10	ゲーム(鬼遊び・ボール運動)	いろいろな鬼遊び、ドッジボール等のボール遊びの実習
11	リズム・表現運動	運動会等の行事で演じる低学年用リズム・表現運動を考える-話し合い-
12	リズム・表現運動	運動会等の行事用のダンス作品(音楽編集や衣装づくりも含む)づくりおよび練習
13	リズム・表現運動	運動会等の行事用のダンス作品(音楽編集や衣装づくりも含む)づくりおよび練習
14	リズム・表現運動	発表会
15	まとめ	発表会のVTR観賞、目標到達度等のアンケートによる授業の振り返りと評価、マイノート提出

このように、幼稚園教育要領、幼児期運動指針等からは、幼児体育に関する内容構成上の指針を明確には読み取れなかったのではあるが、それでも重要なポイントは最大限押さえるとともに、小学校指導要領の学習内容を視野に入れながら「身体表現（体育）A」の授業内容を構成していった。

本研究は Table 1、Table 2 に示す授業計画に従って行った平成 28 年度「身体表現（体育）A」と平成 29 年度「身体表現（体育）B」の内容評価や授業効果の検証を行い、今後の授業改善への示唆を得ることが目的である。

研究の方法

本研究では、学生が行った自己の学びに対する自己評価（目標到達度評価）や、幼児教育現場で求められる実践的指導力自己評価の情報に基づき、当該「身体表現（体育）」授業を通じて、どの程度授業の内容を習得できたか、指導力が身についたか等を定量的に把握し、そのことによって、授業内容の妥当性、授業の効果を類推的に検証しようとするものである。

調査計画：

「身体表現（体育）A・B」の授業は、幼稚園・小学校教諭免許取得のためにはいずれも必修の科目となっている（教職必修）。身体表現 A は 2 回生の秋学期に、B の授業は 3 回生、春学期に配当されている。A の初回授業では、学習を始める前の、幼児教育「表現」実技指導に関する実践的指導力の状況を把握するとともに、進路希望や専門分野の学習に対する学習意欲を測る専門学習動機づけ等の調査を行った。そして、最終授業では、上記の一連の調査を再度実施するとともに、授業に対する直接的な印象評価や、シラバスに示された達成目標につき到達度評価を行ってもらうことにより、直接・間接両面から“授業内容や進め方等、授業全般の質”についての検討材料を得ることを企図した。B についても、調査の手続きは同様であった。

調査内容：

a) 目標到達度評価

シラバスに示された「授業の到達目標」等をもとに授業 A では 27 項目、B については 22 項目からなる調査票を作成し、15 回目最終授業にて実施した（5 段階評価）。この中にはそれぞれの主要な学習領域である「a. 歩く・走る・跳ぶで遊ぶ」「A. 走・跳の運動遊び」、「b. 道具を使って遊ぶ」「B. 器械・器具を使った運動遊び」、「c. 表現・リズム遊び（動物の真似を含む）」「C. 表現・リズム遊び」などの内容理解について尋ね

るものや、それぞれの領域の活動を、楽しく自信をもって展開する力（展開力）、より高レベルな子どもを指導する力・指導技術の習得（指導力）を評価する質問が含まれていた。さらに、幼児体育・身体表現指導に関わるより特殊専門的な知識や態度に関する項目も含まれていた。例えば、「さまざまなタイプの運動・遊びがもっている運動特性について理解できた」「子どもの発達についてよく理解した上で、指導案や指導計画をつくることの重要性を理解した」「服装や授業態度など、指導者として必要な態度・姿勢を意識できた」などの項目である。また、最後の箇所には、「面白かった」「子どもの指導に自信がついた」「指導場面で役立つ授業だった」など、授業の総合的な印象・評価について尋ねる項目も盛り込んだ。

b) 「表現」活動指導力評価尺度による指導力レベルの継続的把握

授業効果検証のための分析ツールの 1 つとして、『「表現」活動指導力評価尺度』（佐橋，2016a，2016b，2017）を 1 年間、継続使用することとした。当尺度は、保育・幼児教育場面でいろいろな「表現」活動を展開していくにあたって必要とされる知識、スキル、能力の習得状況を表現活動指導力と定義し、造形表現、音楽表現、言語表現をも含む幅広い表現活動の指導力を 35 項目により把握するものである（5 段階評価）。

c) 専門学習動機づけ

学習成果と動機づけは密接な関係があるとされる。とりわけ、対象を専門授業、専門領域の学習に焦点を絞った専門領域学習動機づけの状況を把握することは、当該個人の授業での学びの質を検討するにあたって意味のあることと思われる。また、授業そのものの質を検証する意味でも、個人の動機づけ状況を半年～1 年と継続的にたどっていくことで、授業が良い影響を及ぼしたのか、そうでないのかを検討するための判断材料が得られる。13 項目からなる専門学習動機づけ尺度（5 段階尺度）を授業の初回と最終回に実施した。

結果と考察

1. 『身体表現（体育）A』授業における指導力向上

1-1. 到達度評価からみた授業の成果

Table 3 は、身体表現 A（平成 28 年度）の最終授業において学生が行った自身の学びに対する到達度評価や授業の印象について集計を行ったものである。「自身の学びに対する到達度評価」は、以下 Web シラバスの【授業の到達目標】に示されているように、①様々な運動・遊びがもっている運動特性を理解し、

【授業の到達目標】

本授業では、子ども（～小学校就学まで）の発達について理解するとともに、各発達段階に即した運動・身体表現活動の展開の仕方（身体表現技術）、指導法の基礎について学ぶ。目指すのは以下の4つの目標達成である。

- ①さまざまなタイプの運動・遊びがもっている運動特性を理解できる。
- ②ある発達段階では、どのような運動能力の発達が必要か、またどのような運動・遊びの体験が必要かを理解できる。
- ③自分自身の総合的な運動能力を高めるとともに、幼児のための運動・遊びの標準的指導ができる。
- ④運動・遊びを楽しくする創意工夫ができる。

【授業の概要】

運動にはどんな楽しさがあるのか、どんなときに感じるのかについて考えながら、いろいろな運動遊びを実習する。また、幼・小(学校)期のそれぞれの段階に適したねらい、安全への配慮、獲得させたい能力などをできるだけ明確にしなが、グループ活動によるコミュニケーションを活用して、基本的運動の特徴への理解を深め実践能力を高める。

②子どもの発達の諸相を理解するとともに、発達段階に即した、あるいは発達を促す活動を展開していくた

めの基礎知識を身につけること、③自身の運動能力を高めつつ実践力・活動展開力を磨くこと、標準的指導ができるよう指導力を向上させること、④創意工夫力を高めること、などを中心的評価基準として行ってもらった。また、「グループ活動」を主たる授業形態とすることにより、他者の存在、他者の行動がもたらす気づきが自身の学びを深めることを理解したり、協調・協力・グループへの貢献といった価値の重要性を理解することなども副次的な目標とされた（【授業の概要】）。

まず、個別の学習領域に対してではなく、より全般的・総合的な視点での評価について見ていく [(1)～(12), (23)～(27)]。

体育全般に関わる面で「できていた」「目標に到達できた」と十分に評価されたのは(1)(3)(4)であった。これらは、自らが楽しんで体験する中で、運動・表現遊びにはどんな楽しさがあるか、どんな種目特性をもっているかなど、子どもに指導する際のポイントを発見していくという学習プロセスの初期段階を指しているといえるのであるが、ほとんどの学生が“授業での運動や遊びは面白く、楽しんでできた”と回答していた [4.12-(1), 3.92-(3), 4.15-(4)]。しかし、次のステッ

Table 3 「身体表現(体育)A」授業アンケート(学生の到達度評価・授業評価等)の集計結果および学習動機づけとの相関(N=144)

カテゴリー	No	質問内容	平均	SD	因子 I	因子 II	9合成
目標到達度評価	1	子どもへの指導のことを考える前に、何より自分がいくつかの運動・身体活動種目を楽しんでできた	4.12	0.77	.106	.286	.242
	2	いくつかの運動・遊び・身体表現活動が楽しめるくらいに上達した	3.85	0.73	.052	.277	.206
	3	からだを動かす爽快感を授業の中で感じる事ができた	3.92	0.88	.137	.244	.231
	4	からだを動かすこと、体を使って遊ぶことの楽しさ・面白さを体験できた	4.15	0.78	.100	.377	.297
	5	自分自身の総合的な運動能力が高まった	3.42	0.89	.182	.161	.202
	6	授業の中で、いくつかの苦手な運動・身体活動種目を克服することができた	3.22	0.86	.116	.128	.145
	7	さまざまな運動・表現遊びの楽しさは、どこから生まれてくるのか理解できた	3.28	0.80	.317	.345	.394
	8	さまざまなタイプの運動・遊びがもっている運動特性について理解できた	3.49	0.73	.236	.278	.307
	9	子どもの発達と運動・遊びの関係(どの発達段階ではどのような運動・遊びが必要かなど)について、十分に理解した	3.53	0.70	.346	.364	.422
	10	子どもの発達についてよく理解した上で、指導案や指導計画をつくることの重要性を理解できた	3.78	0.77	.113	.279	.241
	11	幼児のための運動・遊びの標準的(基本的)な指導はできるようになったと思う	3.42	0.79	.239	.257	.295
	12	運動・遊びをより楽しくする創意工夫ができるようになった	3.63	0.74	.305	.332	.380
領域別学習内容 個別的	13	「A 歩く・走る・跳ぶで遊ぶ」のテーマで、子どもに対していくつかの活動を実際に展開できる自信がついた	3.33	0.78	.369	.232	.350
	14	「A 歩く・走る・跳ぶで遊ぶ」のテーマで、子どもに対していくつかの活動を指導できる指導技術を身につけた	3.33	0.81	.404	.321	.426
	15	「B 友達とかかわって遊ぶ」のテーマで、友達と触れ合いながらする活動を実際に展開できる自信がついた	3.56	0.77	.374	.292	.391
	16	「B 友達とかかわって遊ぶ」のテーマで、友達と触れ合いながらする活動を指導できる指導技術を身につけた	3.40	0.74	.316	.348	.395
	17	「C 道具を使って遊ぶ」で、ハンブーダンスや縄跳び、輪、竹馬、一輪車などの活動を展開できる自信がついた	3.36	0.83	.296	.216	.300
	18	「C 道具を使って遊ぶ」で、ハンブーダンスや縄跳び、輪、竹馬、一輪車などの活動を指導できる技術を身につけた	3.41	0.86	.314	.250	.332
	19	「D 表現・リズム遊び(動物の真似を含む)」の領域で、多様な表現活動を展開する自信がついた	3.65	0.86	.340	.350	.410
	20	「D 表現・リズム遊び(動物の真似を含む)」の領域で、多様な表現活動を指導できる指導技術を身につけた	3.56	0.85	.365	.312	.399
	21	「E 運動遊びリーダー実習」で、指導者としての話し方や子どもの反応を見ながら活動を進めることの重要性を理解した	3.81	0.86	.269	.413	.412
	22	「E」で、リズム・表現遊びや活動的な運動遊びなどを組み合わせ、多面的に豊かなプログラムを展開することができた	3.61	0.82	.346	.427	.463
態度的側面	23	グループ活動で、アイデアを出したり、役割を果たしたりとグループに貢献する姿勢が示せた	3.96	0.88	.130	.302	.265
	24	グループ発表のクオリティを高めるために、最大限の努力ができた	3.92	0.89	.198	.380	.352
	25	服装や授業態度など、指導者として必要な態度・姿勢を意識できた	4.09	0.84	.148	.340	.299
	26	安全に対する配慮など、指導者として必要な知識を増やすことができた	4.01	0.85	.214	.340	.335
	27	幼児の遊びを意識するようになり、子ども向けテレビや子どもに人気の遊びや音楽に積極的に触れるようになった	3.58	1.02	.374	.408	.468
授業評価	1	どの程度、面白かったですか?	3.80	0.85	.189	.314	.304
	2	どの程度満足でしたか?	3.67	0.85	.085	.256	.211
	3	どの程度、子どもの指導に自信ができましたか?	3.26	0.84	.325	.397	.432
	4	どの程度、指導場面で役立つ授業内容だったと思いますか?	3.84	0.83	.099	.357	.284
	5	全体的に見てあなたは、シラバスで示された「授業の到達目標」にどの程度近づけたと評価しますか?	3.69	0.73	.247	.366	.370

※ I: 学びに対する自信・コミットメント II: 内発的興味

※※ p < .05 p < .01 p < .001

プ、すなわち指導に必要な運動特性の理解 (3.49-(8))とか、どの点に留意すると子どもが楽しめるようになるのか [3.28-(7)]、発達に即してどのような活動を選んでいくべきかの指針を理解する [3.53-(9), 3.78-(10)]、などといった「理解のレベル」になると、目標達成が不十分であるのは否めなかった。

態度的側面については、グループ活動中心の授業スタイルが影響したためか、グループへの貢献を問う項目の評価は総じて高かった [3.96-(23), 3.92-(24)]。

また、指導者としての姿勢や振舞いを意識する [4.09-(25)] や、安全への配慮など指導者として必要な知識を身につけた [4.01-(26)]、などの項目での目標達成度は非常に高かった。

学習内容に関する領域別の評価については、どの領域についても、活動を“子どもの前でやってみることはできる”感じはする、感触は掴んだ、というレベルにとどまっており、自信をもって指導できるレベルには到達できていないことが明らかになった。このこと

は、A. B. D. E. の領域、すなわち C. を除く全領域において評価得点が展開力≧指導力となっていることから確認できる。

授業の総合評価に関しては、(4) 指導場面で役立つ授業内容であった、という項目において、ある程度の評価を得られたが、(3) 子どもの指導に自信がたった、という項目では評価がかなり低くなっており、有意義な学習はできたと感じるものの、十分に指導力が身につき、子どもの運動・表現活動指導に自信が持てる程には至らなかったようである。

1-2. 授業を通じて指導力は向上したか

Table 4 は「表現」活動指導力評価尺度 (佐橋, 2016a) を授業の初回と最終回に実施し、自己評価の推移を見ることにより授業の成果を推測するべく検討を行ったものである。当尺度は、幼稚園教育要領にある5つの保育内容のうち、「表現」領域の保育・教育活動に対する実践的指導力を把握することが目的であったため、身体表現・体育的活動だけでなく、「音楽」

Table 4 身体表現 (体育) A における「表現」活動指導力の変化 (N=140)

No	質問内容	M (第1回)	M (第15回)	平均値差 後-前	S D (第1回)	S D (第15回)	t 値	有意確率	
音楽表現領域	1 保育や幼児教育で必要とされるピアノなど楽器の演奏は基準レベルまで達している	2.56	2.76	.20	1.22	1.26	3.19	.002 **	
	2 保育や幼児教育で必要とされる歌唱などは基準レベルまで達している	2.64	2.99	.34	0.88	1.05	4.75	.000 ***	
	3 弾き語りなど音楽表現の指導で必要とされる基礎技術は身に着けている	2.26	2.52	.26	1.03	1.10	4.09	.000 ***	
	4 歌や音楽で子どもを楽しませることが上手である	2.27	2.64	.36	0.86	1.08	4.67	.000 ***	
	5 いろいろなリズム遊びを指導できる	2.11	2.67	.56	0.77	0.99	7.06	.000 ***	
	6 リズムを応用するなどの学習などで効果が高まることを理解している	2.85	3.14	.29	0.86	0.93	3.17	.002 **	
全体	2.45	2.79	.34	0.70	0.82	7.09	.000 ***		
言語表現領域	7 子ども文学、昔話、童話、長話などに対する広い知識がある	2.09	2.52	.44	0.64	0.88	6.19	.000 **	
	8 物語、絵本の朗読など、言語表現に対する基礎知識、指導力を身に着けている	2.52	2.87	.35	0.89	0.92	4.54	.000 ***	
	9 本の読み聞かせの基本技術は身に着けている	2.50	2.80	.30	0.97	1.00	2.33	.021 *	
	10 乳幼児に対する効果的な読み方やお話の仕方ができる	2.53	2.79	.26	0.88	0.92	3.41	.001 **	
	11 子どもの発達を促すような、良い言語素材を選ぶ能力を身に着けている	2.36	2.76	.40	0.78	0.86	5.15	.000 ***	
	12 手遊びなどの、集中させるための予備動作を効果的に指導できる	2.35	2.71	.36	0.80	0.88	4.62	.000 ***	
	13 いろいろな登場人物のせりふを、ふさわしく演じることができる	2.49	2.81	.31	0.99	0.98	4.14	.000 ***	
	14 物語の舞台設定や効果音などに対する知識を身に着けている	2.19	2.66	.48	0.77	0.96	6.23	.000 ***	
	15 季節ごとの行事などを組み立てるための文学的素材を適切に選ぶことができ、レパートリーも広い	2.08	2.46	.39	0.79	0.87	4.81	.000 ***	
	全体	2.38	2.73	.35	0.65	0.76	6.29	.000 ***	
	造形表現領域	16 いろいろな年齢の子どもにふさわしい造形指導ができる	2.06	2.53	.46	0.76	0.90	6.27	.000 ***
		17 いろいろな方法・手法の作品づくりに熟達している	2.03	2.64	.61	0.76	0.98	7.45	.000 ***
		18 子どもが作ったものからお話や活動を発展させたりすることができる	2.19	2.75	.56	0.82	0.95	7.08	.000 ***
		19 季節を意識した造形活動が展開できる	2.36	2.90	.54	0.87	0.94	6.91	.000 ***
		20 子どもの指導に限らず、一般的な図画工作などの造形表現のスキルは高い	2.17	2.64	.47	0.98	1.05	6.55	.000 ***
21 子どもの身近にある生き物などを描かせたり、作らせたりする指導が上手い		1.92	2.52	.60	0.81	0.96	8.14	.000 ***	
全体	2.38	2.66	.28	0.67	0.83	9.73	.000 ***		
身体表現領域 指導力	22 跳ぶ・走る・投げるなどの基本的な運動の遊びを指導できる	2.66	3.08	.41	0.96	0.92	4.78	.000 ***	
	23 子どもに運動遊びの楽しさを伝えることができる	2.64	3.14	.50	0.95	0.91	6.34	.000 ***	
	24 身近にある用具や道具を使っておもしろい遊びを工夫することができる	2.42	2.94	.52	0.94	0.94	7.39	.000 ***	
	25 指導できる鬼ごっこや伝承遊びのレパートリーは広い	2.39	2.79	.40	0.90	0.95	4.98	.000 ***	
	26 イマジネーション豊かな遊びを考案することができる	2.11	2.74	.63	0.88	0.99	8.83	.000 ***	
	27 遊びが盛り上がる雰囲気づくりができる	2.69	3.14	.46	0.95	1.00	6.01	.000 ***	
	28 楽しい雰囲気を作り出す場面設定や声掛けが上手い	2.46	2.89	.43	0.94	0.99	6.03	.000 ***	
	29 リズムダンスやダンス的な動きを指導するの得意である	2.17	2.64	.47	1.01	1.05	6.68	.000 ***	
	30 大人の真似をしたり、動物になりきったりする表現遊びの指導ができる	2.30	2.87	.57	0.94	0.97	6.68	.000 ***	
	31 創的な表現活動やミュージカルのような音楽と身体表現が融合した表現活動に対する基礎知識がある	2.08	2.64	.56	0.95	1.02	6.79	.000 ***	
	32 できなかったことができるようになる“達成の喜び”を子どもに伝えたいという思いがある	3.48	3.44	-.04	1.06	1.09	-0.36	.720 n.s.	
	33 心身の発達を促すような運動遊びや表現遊びを構成することができる	2.21	2.77	.56	0.83	0.95	7.11	.000 ***	
	34 大人数の子どもたちの遊び(グループ遊び・団体行動)を指導することが上手い	2.11	2.71	.61	0.86	0.96	7.95	.000 ***	
	35 遊びを通じて友達と積極的に関わることの大切さを伝える指導ができる	2.58	3.13	.55	1.03	1.00	6.09	.000 ***	
	全体	2.45	2.92	.47	0.80	0.71	9.55	.000 ***	

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .10

「言語」「造形」表現の保育・教育活動も含む広範なものとなっている。本来、身体表現領域に焦点を絞って、半期、あるいは1年間にわたる推移を見ていくべきところ、他領域との相対的な比較が意味をもつと考え、全領域、全項目についての評価を紹介する。なお、当尺度の因子構造を確認するなどの分析は過去数回行われており(2016a)(2016b)(2017)、基本因子は常に「音楽」「言語」「造形」「身体」の4つであるが、いくつかの項目が分析の時々想定外の因子に寄与するなど、不安定なところもあるのが現状で、ここでは原尺度を受容し、操作は加えないこととする。

様々な領域の「表現」活動指導力の変化について見ていくと、35項目のうち「(32)達成の喜びを伝えたいという思いがある」を除き、すべての得点が初回ベースライン時よりも、授業終了時の方が有意に高いことが明らかになった。

また、身体領域の項目群はとりわけ、授業終了時に他の領域に比べ得点が高い傾向があったが、真に“授業の効果”なのか、単に授業で調査を実施したため、身体表現領域に意識が焦点づけられた結果に過ぎないのか、つまり調査実施が影響したのか判断は難しい。が、一つの推論として、他の領域の能力も一様に向上していることから、2回生の秋学期半年間には、様々

な実技的な専門の学びが提供されており、表現活動全体のレベルアップが進んだといえるのではないだろうか。体育はその一端を担ったものと考えられる。

1-3. 学習への取り組み姿勢(専門学習動機づけ)と到達度評価

Table 3には、専門学習動機づけの状況と、達成度評価の関連について検討した結果が示してある。本データについて、学生の専門学習に関する動機づけは「I. 学びに対する自信・コミットメント」「II. 内発的興味」の2因子によって、より詳細に把握できると考えられた(因子分析の詳細については、佐橋(2017)参照)。第I因子は、これまでの学びに対する自信や習熟感を表すとともに、日々の学習に対する意気込みや頑張り、努力の度合いを表し、第II因子は、学びに伴う楽しい、面白いといったポジティブな感情体験と学習やボランティア活動などへの興味と関与を示すものであった。したがって、第I因子の意味から言って、個別・領域別の授業内容に関する到達度評価と強い結びつきを示す結果となっており、一方、第II因子は、感情的側面や態度的側面の評価との関連性が比較的強い傾向にあった。

尺度全体として、専門学習動機づけのレベルと目標到達度評価の関連性については、1項目を除き全評価

Table 5 「身体表現(体育)B」授業アンケート(学生の到達度評価・授業評価等)の集計結果および学習動機づけとの相関(N=153/151)

カテゴリー	No	質問内容	H29年7月データ		H28年7月データ		因子I	因子II	9合成
			平均	SD	平均	SD			
目標到達度評価	「体育」全般的	1 子どもに指導する前に、自身がいくつかの運動・身体活動種目を楽しんでできるくらいに上達した	3.55	0.83	3.69	0.80	.216	.359	.317
		2 いくつかの運動・身体活動種目の展開の仕方、ルール改良等の工夫などについて習得した	3.60	0.85	3.65	0.67	.330	.342	.381
		3 からだを動かす爽快感を授業の中で感じることができた	3.74	0.90	3.84	0.90	.281	.344	.351
		4 運動・表現遊びの楽しさの源泉がどこにあるか理解できた	3.44	0.76	3.53	0.85	.443	.349	.457
		5 幼児の運動遊び(身体表現A)から小学校低学年体育(身体表現B)への連続性について意識できた	3.40	0.76	3.52	0.72	.383	.239	.364
		6 小学校指導要領「体育科」の指導内容(低学年)の全体像を理解した	3.38	0.71	3.42	0.71	.316	.286	.345
		7 指導要領の記述について、低学年、中学年、高学年の違いを理解した	3.47	0.84	3.54	0.79	.304	.379	.383
	態度的側面	8 グループ活動で、アイデアを出したり、役割を果たしたりとグループに貢献する姿勢が示せた	3.90	0.89	4.06	0.81	.192	.235	.240
		9 グループ発表のクオリティを高めるために、最大限の努力ができた	3.93	0.80	4.02	0.77	.260	.271	.301
		10 授業の中で、いくつかの苦手な運動・身体活動種目を克服することができた	3.48	0.87	3.49	0.80	.288	.209	.288
	指導要領関連	11 「A からだづくり運動」のいくつかの活動例を実際に展開できる自信がついた	3.26	0.82	3.39	0.63	.432	.280	.415
		12 「A からだづくり運動」のいくつかの活動例を指導できる指導技術を身につけた	3.24	0.81	3.29	0.67	.429	.323	.435
		13 「C 走・跳の運動遊び」のいくつかの活動例を実際に展開できる自信がついた	3.26	0.78	3.37	0.71	.380	.265	.374
		14 「C 走・跳の運動遊び」のいくつかの活動例を指導できる指導技術を身につけた	3.18	0.79	3.26	0.68	.386	.343	.417
		15 「B 器械・器具を使つての運動遊び」のいくつかの活動例を実際に展開できる自信がついた	3.20	0.88	3.36	0.74	.349	.207	.326
		16 「B 器械・器具を使つての運動遊び」のいくつかの活動例を指導できる指導技術を身につけた	3.18	0.90	3.25	0.76	.387	.281	.387
		17 「E ゲーム」領域のボールゲームや鬼遊びなど、いくつかの活動例を展開できる自信がついた	2.93	0.82	3.35	0.91	.329	.207	.313
		18 「E ゲーム」領域のボールゲームや鬼遊びなど、いくつかの活動例を指導できる指導技術を身につけた	2.94	0.81	3.30	0.91	.416	.255	.393
		19 「F 表現リズム遊び」のいくつかの活動例を実際に展開できる自信がついた	3.46	0.92	3.51	0.82	.412	.316	.421
		20 「F 表現リズム遊び」のいくつかの活動例を指導できる指導技術を身につけた	3.48	0.94	3.51	0.80	.447	.275	.422
	態度的側面	21 服装や授業態度など、指導者として必要な態度・姿勢を意識できた	4.10	0.90	4.06	0.78	.227	.334	.312
		22 安全に対する配慮など、指導者として必要な知識を増やすことができた	4.02	0.85	4.07	0.74	.318	.338	.372
授業評価	1 どの程度、面白かったですか?	3.46	0.79	3.89	0.77	.187	.323	.281	
	2 どの程度満足でしたか?	3.42	0.79	3.82	0.77	.161	.281	.243	
	3 どの程度、子どもの指導に自信ができましたか?	3.20	0.74	3.35	0.75	.310	.193	.294	
	4 どの程度、指導場面で役立つ授業内容だったと思いますか?	3.47	0.75	3.90	0.77	.249	.226	.271	

※ I: 学びに対する自信・コミットメント II: 内発的興味

※※ p < .05 p < .01 p < .001

項目で有意な相関が認められた。すなわち、動機づけレベルの高い学生の目標到達度評価は、体育全般にわたる到達度評価、個別の学習領域に関する到達度評価、態度的側面の評価、授業評価について、すべて高い傾向にあることが確認された。

2. 『身体表現（体育）B』授業における指導力向上

2-1. 到達度評価からみた授業の成果

Table 5 には、「身体表現（体育）B」終了時に、実施した目標到達度評価の集計結果と、比較のため、前年度授業「身体表現（体育）B」の到達度評価（佐橋，2016b）を示した。さらに、専門学習動機づけとの相関分析の結果も併記した。

全体的な傾向として、授業 A の評価の傾向と同じく、態度的側面の評価が相対的に高いことがわかる。すなわち、グループ活動でグループに貢献し [3.90-(8)]、発表やグループパフォーマンスのクオリティを高める努力ができた [3.93-(9)] と自己評価してい

る。とともに、指導者として相応しい態度・姿勢を意識できた [4.10-(21)]、指導者として必要な知識を増やすことができた [4.02-(22)] と回答している。

一方、学習指導要領に定められた内容等の学習に関しては、相対的に学習成果が不十分と評価をする傾向があった [(11)~(20)]。

授業の全般の評価についてはかなり厳しい内容のもので、反省を求められるようなものであった。最もストレートな反応である、「面白かった」「満足だった」についての厳しい評価は、授業運営をめぐって、少なからず問題があったと思われる、その問題が具体的に教材なのか、授業形態なのか、指導方法なのか、授業者なのか、どの要因にあるのかを特定する必要がある。

いずれにせよ、当授業データ単独では読み取りに限界があるため、先年度授業のデータと比べてみるなどの方法しかないが、実は、平成 29 年度の授業評価は、それに比べると全体的に明らかに低い。ほぼ同じ授業内容・計画であったため、この違いが何を意味するか、

Table 6 身体表現（体育）B における「表現」活動指導力の変化 (N=143)

No	質問内容	M	M	平均値差	SD	SD	t 値	有意確率
		(第1回)	(第15回)		後-前	(第1回)		
音楽表現領域	1 保育や幼児教育で必要とされるピアノなど楽器の演奏は基準レベルまで達している	2.61	2.87	.36	1.13	1.16	5.11	.000 ***
	2 保育や幼児教育で必要とされる歌唱などは基準レベルまで達している	2.73	2.91	.18	1.02	1.01	2.65	.009 **
	3 弾き語りなど音楽表現の指導で必要とされる基礎技術は身に着けている	2.38	2.74	.36	0.90	0.98	5.06	.000 ***
	4 歌や音楽で子どもを楽しませることが上手である	2.45	2.68	.23	0.98	0.96	2.83	.005 **
	5 いろいろなリズム遊びを指導できる	2.43	2.78	.34	0.85	0.91	4.78	.000 ***
	6 リズムを応用するなどの学習などで効果が上がることを理解している	2.94	3.09	.15	0.87	0.87	1.79	.075 +
	全体	2.57	2.84	.27	0.74	0.80	5.44	.000 ***
言語表現領域	7 子ども文学、昔話、童話、民話などに対する広い知識がある	2.35	2.53	.18	0.82	0.82	2.57	.011 *
	8 物語、絵本の朗読など、言語表現に対する基礎知識、指導力を身に着けている	2.83	2.94	.11	0.86	0.81	1.51	.135 n.s.
	9 本の読み聞かせの基本技術は身に着けている	3.10	3.18	.08	0.87	1.00	1.19	.236 n.s.
	10 乳幼児に対する効果的な読み方やお話の仕方ができる	2.90	3.11	.22	0.94	0.96	2.94	.004 **
	11 子どもの発達を促すような、良い言語素材を選ぶ能力を身に着けている	2.70	2.96	.26	0.81	0.91	3.74	.000 ***
	12 手遊びなどの、集中させるための予備動作を効果的に指導できる	2.71	2.94	.23	0.78	0.87	3.44	.001 **
13 いろいろな登場人物のせりふを、ふさわしく演じることができる	2.79	2.97	.18	0.90	0.87	2.55	.012 *	
14 物語の舞台設定や効果音などに対する知識を身に着けている	2.54	2.84	.30	0.80	0.90	4.37	.000 ***	
15 季節ごとの行事などを組み立てるための文学的素材を適切に選ぶことができ、レパートリーも広い	2.47	2.71	.24	0.85	0.97	3.36	.001 **	
	全体	2.71	2.91	.20	0.64	0.72	4.44	.000 ***
造形表現領域	16 いろいろな年齢の子どもにふさわしい造形指導ができる	2.52	2.82	.29	0.85	0.91	4.52	.000 ***
	17 いろいろな方法・手法の作品づくりに熟達している	2.52	2.78	.26	0.93	0.97	3.74	.000 ***
	18 子どもが作ったものからお話や活動を発展させたりすることができる	2.51	2.83	.31	0.89	0.92	4.81	.000 ***
	19 季節を意識した造形活動が展開できる	2.76	3.05	.29	0.93	0.89	3.98	.000 ***
	20 子どもの指導に限らず、一般的な図画工作などの造形表現のスキルは高い	2.60	2.83	.23	1.10	1.00	3.12	.002 **
21 子どもの身近にある生き物などを描かせたり、作らせたりする指導が上手い	2.40	2.73	.34	0.85	0.96	4.48	.000 ***	
	全体	2.55	2.84	.29	0.80	0.81	5.83	.000 ***
身体表現領域指導力	22 跳ぶ・走る・投げるなどの基本的な運動の遊びを指導できる	2.85	3.07	.22	0.91	0.91	3.18	.002 **
	23 子どもに運動遊びの楽しさを伝えることができる	2.94	3.30	.36	0.96	0.93	4.51	.000 ***
	24 身近にある用具や道具を使っておもしろい遊びを工夫することができる	2.77	3.04	.27	0.87	0.96	3.54	.001 **
	25 指導できる鬼ごっこや伝承遊びのレパートリーは広い	2.68	2.91	.23	0.90	0.95	4.25	.000 ***
	26 イマジネーション豊かな遊びを考案することができる	2.52	2.83	.31	0.90	0.92	4.29	.000 ***
	27 遊びが盛り上がる雰囲気づくりができる	2.97	3.18	.22	0.94	0.98	2.71	.008 **
	28 楽しい雰囲気を作り出す場面設定や声掛けが上手い	2.71	3.08	.38	0.95	0.95	4.88	.000 ***
	29 リズムダンスやダンス的な動きを指導するのが得意である	2.46	2.89	.43	0.97	0.97	5.99	.000 ***
	30 大人の真似をしたり、動物になりきったりする表現遊びの指導ができる	2.69	3.01	.32	0.91	0.95	4.31	.000 ***
	31 劇的な表現活動やミュージカルのような音楽と身体表現が融合した表現活動に対する基礎知識がある	2.50	2.83	.33	0.87	0.89	4.60	.000 ***
	32 できなかったことができるようになる“達成の喜び”を子どもに伝えたいという思いがある	3.51	3.38	-.13	1.05	0.93	-1.39	.166 n.s.
	33 心身の発達を促すような運動遊びや表現遊びを構成することができる	2.62	2.97	.35	0.87	0.90	5.02	.000 ***
	34 大人数の子どもたちの遊び(グループ遊び・団体行動)を指導することが上手い	2.57	2.87	.29	0.98	0.95	3.52	.001 **
	35 遊びを通じて友達と積極的に関わることの大切さを伝える指導できる	2.97	3.23	.27	1.00	0.89	3.55	.001 **
		全体	2.77	3.05	.28	0.76	0.74	5.68

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .10

考えていく必要がある。

2-2. 授業を通じて指導力は向上したか

Table 6 は、初回と最終回の授業時に収集した「表現」活動指導力に関するデータである。

4 領域全体を通覧すると、授業 A を前年に履修し、そこで指導力の向上が見られ (Table 4)、次年度引き続き授業 B に取り組んだ後にも、再び指導力の向上はほぼ全面的に確認されたことがわかる。

各領域で見られる数値変化のパターンも授業 A のデータ (Table 4) と類似したものになっている。変化パターンの理解には、両授業における各領域「全体」の変化量を比較することが効果的であると思われるので、領域全体の平均値差 (後-前) に着目する。「音楽」領域では A (0.34)→B (0.27)、「言語」領域では A (0.35)→B (0.20)、「造形」A (0.54)→B (0.29)、「身体」A (0.47)→B (0.28) という変化が見られており、概して「造形」「身体」の変化量 (増加) が他に比べ比較的高く、また「音楽」の B だけは「造形」「身体」に並ぶ数値であった。

A・B 全体を通じた指導力向上に関しては、後の第 3 項にて詳述するが、大きな傾向について触れると、やはり、総じて A の授業において劇的な指導力向上が起これ、続く B の授業では、その改善幅は相対的に小さくなるということが言える。これは、未経験であった学習領域に初めて取り組み、新しい知識や技能、指導技術が身についた時期には、当然、指導力認知の変化は大きい、次の発展授業では、ある程度の学習の深まりはあるものの、劇的な能力の向上を認知しにくいのではないかと考えられる。ただ、B 授業を通じて指導力の向上は統計的に証明されている。

2-3. 専門学習動機づけと到達度評価

Table 5 には、専門学習動機づけと到達度評価の関

連性について相関分析により検討した結果を示した。また、それに先立ち専門学習動機づけの調査項目に対し、縮約のために因子分析を試みた結果を Table 7 に示した。A 授業終了時の専門学習動機づけについての因子分析の結果 (佐橋, 2017) と同じく、「I. 学びに対する自信・コミットメント」因子と「II. 内発的興味」の 2 因子を抽出した。ただ、「12. 子どもに関わる職業につきたいので、ボランティア活動など積極的に参加している」の項目は、前分析では第 II 因子に高い負荷を示していたが、今回は第 I 因子への負荷が高く、この因子に属する項目と考えて分析を進めることとした。

目標到達度との関連を見たところ、第 I 因子と各学習領域の学習達成度との間に、中程度の相関が認められ、日ごろから専門の学びに対し、積極的な姿勢で臨む学生は、授業の具体的な学びの成果を高く評価する傾向にあった。一方、楽しさとか興味といった内発的動機づけの固有の要素については、学習成果の評価という観点との関連性が相対的に低い傾向があった。これは、A の時と同じ結果であった。

3. 身体表現授業全体を通じた授業効果の検証

Table 4・Table 6 では、半期授業の最後に学生の実践的指導力が授業成果の表れとして実際に向上しているかどうか検討した。結果、A・B どちらの授業終了時にも、身体表現領域に限らずその他すべての領域において、自己評価による実践的指導力の有意な上昇を認めたが、ここでは、分析のまとめとして、2 つの授業の一年間を通じて、指導力レベルがどのように推移していったか変化の状況を見ていきたい。B 授業開始前には年度末休暇があり、A 授業でレベルアップした後、B 授業開始時にはそのレベルは保持されていた

Table 7 専門学習動機づけ項目に対する因子分析の結果 (主因子法・バリマックス回転) (B 後 N=152)

No	I	II
I. 学びに対する自信・コミットメント (M = 2.97, SD = 0.71, α = .801)		
11 子どもに関わる職業につきたいので、理論的な勉強を日々怠らない	.940	-.051
10 保育・教育に必要な基礎的知識はかなり身につけたと思う	.606	.539
9 保育・教育に必要な基礎的知識はかなり身につけたと思う	.594	.541
12 子どもに関わる職業につきたいので、ボランティア活動など積極的に参加している	.541	.187
8 保育・教育に関する理論の勉強は楽しい	.534	.442
II. 内発的興味 (M = 3.53, SD = 0.69, α = .672)		
3 子どもについて学ぶことは楽しい	.272	.753
2 保育や教育の分野の勉強は興味深い	.360	.696
7 保育・教育に関する実技科目の勉強は楽しい	.330	.627
*4 子どもの保育・教育を学ぶ学科を選んだけれども、子どもが好きかといわれると自信がない	-.123	.243
(M = 3.22, SD = 0.61, α = .809)		

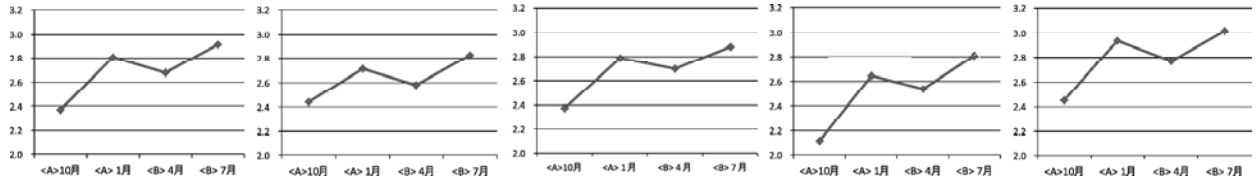


Fig. 1-1 指導力の推移 (全体) Fig. 1-2 指導力の推移 (音楽) Fig. 1-3 指導力の推移 (言語) Fig. 1-4 指導力の推移 (造形) Fig. 1-5 指導力の推移 (身体)

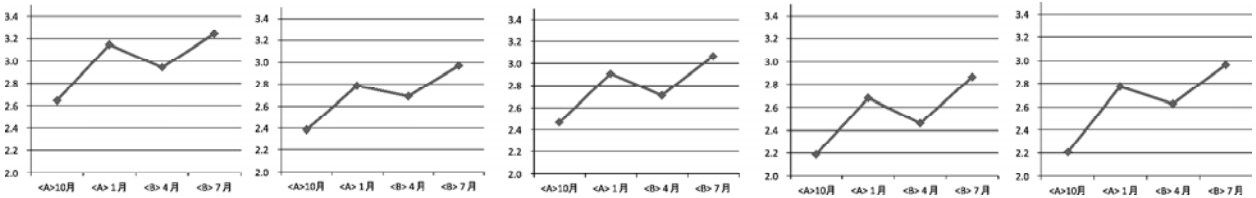


Fig. 2-1 遊びの楽しさを伝えることができる (23) Fig. 2-2 鬼・伝承遊びのレパートリーは広い (25) Fig. 2-3 楽しい雰囲気作りのための場面設定・声かけができる (28) Fig. 2-4 リズムダンスの指導ができる (29) Fig. 2-5 発達を促す表現遊びを構成できる (33)

たのかどうか、また、B 授業終了後にはどうなったのかについて、一元配置分散分析により検討してみたい。また、以下では、4つの測定時期について Time 1～Time 4 と呼んでいきたい。

Figure 1 は、「表現」活動指導力評価尺度の全項目の平均値、ならびに各下位尺度の平均値をプロットしたものである。分散分析の結果は、それぞれ順に、 $F=60.24, 21.90, 32.94, 58.57, 52.42$ となっており、平均値差は統計的に有意であった。変化パターンについて4領域すべてに共通する定則性は、①年度末には休みモードに入るため、B 開始前 (Time 3) には Time 2 よりも若干のレベル低下、逆戻り現象を起している。ただし、多重比較 (Bonferroni 法) の結果、Time 2～Time 3 間で、この逆戻り現象が統計的に検証されたのは、「全体」と「身体」に関してのみである。②Time 1～Time 2 間の勾配、Time 3～Time 4 間の勾配を比較すると、前者の方が急で、目立った学習効果・授業効果は最初の授業の方に現れやすく、発展授業の方では、統計的に有意な指導力上昇はあるものの、授業効果の表れ方としてはより穏やかである。この傾向がとりわけよく現れているのが、「言語」「造形」「身体」であろうか。また多重比較の結果、③Time 1<Time 2, Time 4 の関係性は常に検証されたが、Time 2<Time 4 の関係性が証明されたのは「造形」においてのみであった。授業前 (Time 1) よりも、1年を経た時 (Time 4) に最高値を示しており、「音楽表現」「言語表現」「造形表現」「身体表現」のそれぞれの授業の効果は認められたといってよいだろう。

次に、「身体表現領域」の具体的項目について見て

みると、やはり、Time 2 から Time 3 の落ち込みはどの項目においても見られ、ある意味、数か月学校から離れるということがもたらす当然の結果なのかもしれない。

Figure 2 を見るとスタートのレベルがすでに高いものの、着実に学びの成果を積み上げてきたと考えられる評価項目は「23. 子どもに運動遊びの楽しさを伝えることができる」がその代表である。逆に、スタート時点では評価が全く低かったものの、授業を通じて劇的に指導スキルを身につけていったと解されるのは、「29. リズムダンスやダンス的な動きを指導するのが得意」「33. 心身の発達を促すような運動遊びや表現遊びを構成することができる」といった観点である。

いずれにせよ、身体表現指導に関わる 14 の評価項目に対する分散分析の結果は、「32. できなかったことができるようになる“達成の喜び”を子どもに伝えたいという思いがある」の 1 項目を除き、すべての項目についてスキル上昇が統計的に有意であることを検証している。また、各項目に対する多重比較の結果より、Time 1<Time 2, Time 1<Time 3, Time 1<Time 4, Time 3<Time 4 の関係性は検証されており、授業を通じて実践的指導力評価が上昇する、すなわち、授業の一定の効果が現れていると解してよいと思われる。また、初回の基礎的授業での成長の伸びは大きく、発展段階の授業になると、幾分成長のペースは鈍るものの、さらなる成長が確認されたといってよい。

4. 希望進路の違いによる達成度評価・指導力評価

様々な保育関連の職業に対する就業希望調査をもと

に、クラスター分析の手法により、違いが最大となるようなグループに分類する作業を行った (Figure 3)。各グループの特徴を示すと、clu 2 は就職に関する意識は全般的に高くなく、消極的な選択として、その中では小学校教諭となることを目標に置いているグループである。clu 4 は、児童福祉施設等の福祉中心の仕事への就職を希望するグループ、clu 3 は保育・幼稚園への就職を希望するが、とりわけ保育公務員としての就職を強く希望しているグループ、clu 1 は保育園・幼稚園への希望は高いが、公立施設ではなく、私立の施設を希望するグループと特徴づけられる。

専門学習動機づけのレベルについてグループ間比較すると、「I. 学びに対する自信・コミットメント」「II. 内発的興味」ともに、平均値差は統計的に有意であったが、第1因子におけるclu 3-保育公務員希望グループの動機づけレベルが顕著に高くなっていたのが特徴的であった。

「表現」活動指導力については、「身体表現」を除く領域すべてで、指導力のレベルに有意な差異が認められた ($F=4.50^{**}, 4.66^{**}, 4.39^{**}, 1.33 \text{ ns}, 3.71^{*}$)。どの領域においても、再びclu 3-保育公務員志望グループの突出が目を引く。続き、clu 1-幼保志望グループの指導力評価が高くなっている。一連の多重比較は、clu 3と他グループの間に有意差があることを示していた。その他の比較ペアに関しては、どの領域におい

ても最低値を示すclu 2-消極的小学校選択グループとclu 1の間に有意差が散見されるという結果であった。

最後に、授業目標に対する到達度評価と授業の印象評価についても、平均値差の検定では、態度的側面のみ有意傾向が認められたに過ぎないものの、これまでの一連の分析と同様に、clu 3-保育公務員志望グループの目標到達度評価が、最も高い数値を示していた。すなわち、授業においてよく学べた、学習成果が実感できたと評価していることがわかった。一方で、clu 4-児童福祉施設への就職を希望するグループの到達度評価は最も低く、授業での学びはあまり納得のいくものではなく、知識や指導スキルを十分に身につけることができなかったと評価していた。

まとめ

本研究は、学生の到達度評価や指導力評価の推移傾向から、教職授業「身体表現 A・B」の授業効果を検証することが目的であった。

授業 A について、到達度評価によって類推的に把握される“授業の成果”は、個々の学習内容・テーマにではなく、「グループへの貢献」や「話し合い・協力姿勢の大切さ」「指導者として相応しい振舞い」「安全管理など指導場面で必要となる基本知識の獲得」などの態度的側面に顕著に現れていた。その他に、授業成果という点で、成果があがったといえるのは（厳密

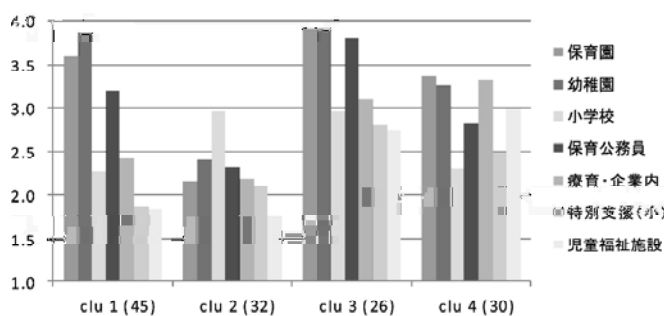


Fig. 3 希望進路によるグループ化

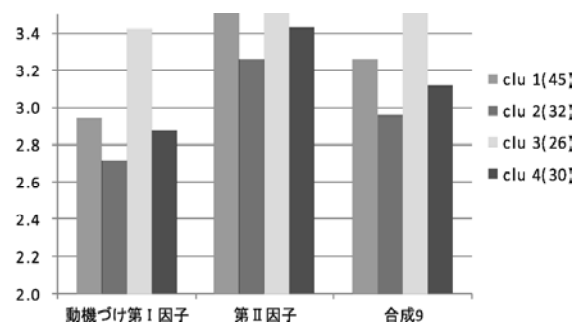


Fig. 4 希望進路と専門学習動機づけ

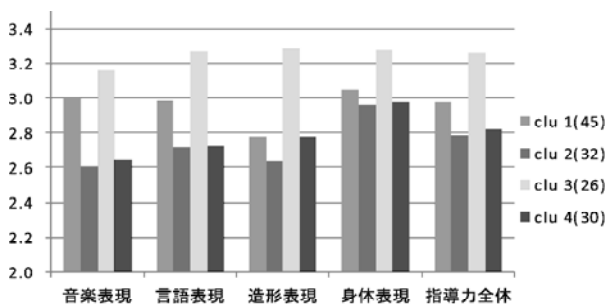


Fig. 5 希望進路と指導力評価

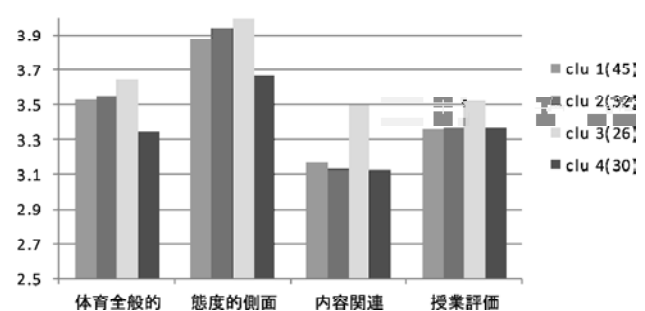


Fig. 6 進路と到達度評価・授業評価

な意味で成果とはいえないのかもしれないが)、「楽しいという体験⇒どこにその楽しさがあるのか種目特性・指導のポイントを理解する」という段階的な学習プロセスのうち、初期段階の「運動や遊びにまつわるポジティブな感情体験」というレベルだけはクリアしていたといえる。

指導力評価からみた授業成果については、表現活動指導力評価尺度の得点を検討したところ、身体表現領域のみならず、他の表現領域に関して有意な得点上昇が見られ、このことをもって授業成果の証左とした。

授業 B における成果の検討については、ほぼ、上述同様の結果が明らかになった。個別の学習内容に対してではなく、態度的な側面、学習に内在する肯定的な感情体験に対する高評価が特徴といえた。一方で、小学校学習指導要領に則り設定されたテーマの学習についての評価は、低いものであった。

指導力評価に関しては、A の分析と同じく、統計的に有意な得点上昇が確認されたため、一定程度の授業効果を証明できたものとする。

A・B 合わせて 1 年間を通じての授業成果という点では、指導力評価の推移を統計的に分析したところ、授業 A の初頭レベルと比べ、A 終了時と B 終了時には、統計的に有意な上昇が確認され、両授業の教育効果に対する裏づけを得た。また、この指導力向上から推し量れる授業効果の大きさには、数値上差異が見られた。すなわち、基礎授業 A での変化量は、発展授業 B の変化量に比べ大きく、学生は基礎授業において、学びの成果をより強く実感したと思われる。

最後に、付加的な分析として、将来の進路など個人内要因が、授業評価に何らかの影響を及ぼす可能性はないか、探索的検討を試みた。予想どおり、授業評価、専門学習動機づけ、指導力評価などほとんど観点について、希望進路に関して違いが最大となるよう分割されたグループ間に、ほぼ一貫した得点パターン・特徴が現れる結果となった。すなわち、保育・教育公務員を目指すグループは、積極的な態度で授業に臨む傾向があり、その結果得られる授業成果についても最も高く評価するということが示され、授業評価の際の検討要因として、将来の進路などの個人内変数を加えることの有効性が示唆された。

参考文献

麻生和江 (2005) 「小学校の体育を指導できる力の向上を目指した初等体育における授業内容 (表現運動) - 選択制 15 コマの事例として」『体育科教育学研究』、

第 21 巻、第 1 号、pp. 39-42。

古市久子 (2012) 『身体表現』、北大路書房。

平田智久・小林紀子・砂上史子 (編) (2016) 『最新保育講座 11 保育内容「表現」』、ミネルヴァ書房。

岩崎洋子・吉田伊津美・朴淳香・鈴木康弘 (2015) 『保育と幼児期の運動あそび』、萌文書林。

河邊貴子・柴崎正行・杉原隆 (編) (2015) 『最新保育講座 7 保育内容「健康」』、ミネルヴァ書房。

厚生労働省 (2008) 『保育所保育指針』、フレーベル館。
厚生労働省 (2008) 『保育所保育指針解説書』フレーベル館。

厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針』、保育出版社 (非売品)。

文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領』、教育出版。

文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説-体育編-』、東洋館出版社。

文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領』、教育出版。

文部科学省 (2008) 『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館。

文部科学省 (2017) 『幼稚園教育要領』、教育情報出版 (非売品)。

文部科学省 (2012) 『幼児期運動指針』

文部科学省幼児期運動指針策定委員会 (2013) 『幼児期運動指針ガイドブック- 毎日、楽しく体を動かすために-』

森野美央・飯牟礼悦子・浜崎隆司・岡本かおり・吉田美奈 (2011) 「保育者効力感の変化に関する影響要因の縦断的検討」『保育学研究』、第 49 巻、第 2 号、pp. 96-107。

無藤隆・汐見稔幸・砂上史子 (2017) 『3 法令ガイドブック- 新しい『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の理解のために-』、フレーベル館。

長野敏晴・小磯透・鈴木和弘 (2011) 「走運動の基本的動作習得を目指した体育学習- 低学年児童を対象とした授業実践を通して-」『発育発達研究』、第 53 号、pp. 1-7。

日本発育発達学会 (編) (2014) 『幼児期運動指針実践ガイド』、杏林書院。

西洋子・本山益子・鈴木裕子・吉川京子 (2007) 『子ども・からだ・表現- 豊かな保育内容のための理論と演習』、市村出版。

西山修 (2006) 「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」『保育学研究』、第 44 巻、第 2 号、pp. 150-160。

佐分利育代 (2005) 「小学校の体育を指導できる力の向上を目指した初等体育における授業内容 (表現運動) - 教員養成課程における現状 -」『体育科教育学研究』第 21 巻、第 1 号、pp. 35-38。

佐橋由美 (2016a) 「幼児・初等教育専攻学生のための「表現」活動指導力評価尺度の作成 - 「身体表現」「体育」の観点を中心に -」『大阪樟蔭女子大学付属子ども研究所紀要、子ども研究』、第 7 巻、pp. 64-72。

佐橋由美 (2016b) 「幼稚園・小学校教職課程における「身体表現 (体育) B」の授業内容の検討と学生の到達度評価、実践的指導力向上からみた授業効果の検証」『樟蔭教職研究』、第 1 号、pp. 37-44。

佐橋由美 (2017) 「身体表現 (体育) A」授業を通じた実践的指導力の向上 - 授業内容の検討と学生の到達度評価・指導力評価からみた授業効果の検討 -」『大阪樟蔭女子大学付属子ども研究所紀要、子ども研究』、第 7 巻、pp. 39-48。

杉原隆・河邊貴子 (編著) (2015) 『幼児期における運動発達と運動遊びの指導 - 遊びのなかで子どもは育つ -』、ミネルヴァ書房。

高濱裕子 (2000) 「保育者の熟達化プロセス: 経験年数と事例に対する対応」『発達心理学研究』、第 11 巻、pp. 200-211。

高橋健夫・野津有司 (編著) (2008) 『小学校学習指導要領の解説と展開 - 体育編 -』、教育出版。

Examining Learning Contents of Subjects Physical Expression (Physical Education) A・B and Its Educational Effects through Students' Goal-Attainment Evaluation and Teaching Skill Development

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Yumi SAHASHI

Abstract

The purpose of this study was two-fold: 1. Examine the appropriateness of the contents and materials of the subjects "Physical Expression (Physical Education) A and B" (required kindergarten and elementary teaching license subjects). 2. Through the students' self-rating data such as goal-attainment evaluation on learning goals for the class and estimate of their teaching skill development, verify the effectiveness of the class in nurturing practical leadership ability. On goal setting for Physical Expression (Physical Education) A and B, the understanding of the PE-specific field or theme, (mainly based on the MEXT's national curriculum guideline), and desirable attitudes and behavior as a teacher were considered. The extent of teaching skill development was estimated by a 35-item Teaching Skill Measurement Scale on Expressive Activities.

The analysis of the results of goal-attainment evaluation and their teaching skill development, found that in regard to attitudinal aspects, that levels of goal attainment were high in both Physical Expression A・B, but there was a lack of understanding of PE-specific learning themes, leading to the conclusion that the suitability and appropriateness of lesson contents was inconclusive. On the other hand, statistical analysis of variances on levels' change of Expressive Activities Teaching Skill Scale revealed a significant rise over the course of both the subjects of Physical Expression A and B, and at the conclusion of each class. This result suggests that Physical Expression A・B classes bring about a certain amount of educational effect.

Keywords: Physical Expression (Physical Education) A・B as required teaching license subjects, examination of learning contents of PE class and its educational effects, goal-attainment evaluation, teaching skill development